

Toivo J. Holopainen :

*Dialectic & Theology in the Eleventh Century,*

E. J. Brill, 1996, pp. 171

矢 内 義 顕

本書は、トゥールのベレンガリウス (Berengarius Turonensis c. 1005-1088) とその同時代人ペトルス・ダミアニ (Petrus Damiani 1007-1072), ベックのランフランクス (Lanfrancus Beccensis c. 1010-1089), カンタベリーのアンセルムス (Anselmus Cantuariensis 1033/34-1109) を各々取り上げ、弁証論理学 (dialectica) の神学への適用という観点から、彼らが神学的方法の発展に果たした役割を論じるものである。

著者のトイヴォ・J・ホロバイネンはフィンランドのヘルシンキ大学の組織神学科で教えている。97年にエアフルトで開催された国際中世哲学会では、The Role of Philosophy in Theology のセクションで Augustine, Berenger, and Anselm: On the Role of Reason in Theology というタイトルで発表を行っていた。本書は1995年にヘルシンキ大学に提出された学位論文がもとになっている。

今世紀の初頭、エンドレス (J. A. Endres) は初期スコラ学に関する一連の論文において、11世紀の知的世界を「弁証論理学者」(Dialektiker) 対「反弁証論理学者」(Antidialektiker) という図式によって描いた。すなわち、前者にはベレンガリウスとベザテのアンセルムス (Anselmus de Besate) が、後者にはペトルス・ダミアニ、ランフランクス、ツァナドのゲラルドゥス (Gerardus Csanadiensis ?-1049), 聖エメラムのオトロ (Otloh de Sancto Emmerano c. 1010-1079), ラウテンバッハのマネゴルト (Manegoldus Lautenbacensis 1030/45-1103) が属する。ただしランフランクスは、自由学芸を取り入れ、またそれを一定の範囲で神学にも適用したことから、反弁証論理学者というよりは、むしろスコラ学の先駆者とみなされている。そして以上の図式はその後の哲学史において一般に受け入れられてきた。

本書が目指すのは、ベレンガリウスを中心にしてこの図式を書き変えることである。

まず、ペトルス・ダミアニは極端な反弁証論理学者ではなく、「穏健な」(to a mild degree) それと性格付けられる (p. 43)。もちろん、彼自身は弁証論理学を神学に適用せず、神学的方法の発展に貢献することはなかった。他方、ランフランクスは、確か

に、その聖書註解においては弁証論理学を分析の道具として使用し、またベレンガリウスとの聖餐論争においても神学的テキストの分析にはこれを使用する。しかし、その結果を提示する際には、彼が、'aequipollentiae propositiones' と呼ぶ手続き (417A)、つまり弁証論理的な表現を避け、別の表現で言い換えることにより、弁証論理学を用いたことを隠す。さらに、彼は弁証論理学によってベレンガリウスを論駁したのではなく、後者の主張を不当に曲解することにより詭弁的な仕方でも論駁する。また聖体の変化を説明するさいにアリストテレスの概念を用いているわけではない。したがって、ランフランクスは、11世紀において神学に弁証論理学を適用した代表者とするにはできないとされる (p. 67)。

これに対し、従来、「合理主義者」(Endres)、「素朴な存在論」(Geiselman, Sheedy)、「弁証論理的であるよりは文法的」(Southern) と評されて来たベレンガリウスに、著者は弁証論理学のより洗練された活用を見出す。彼はアウグスティヌスのプログラムに従って (cf. *De ordine* 2. 13. 38; 16. 44)、教会の諸権威を解釈するために弁証論理学を使用する。彼にとって理性は権威の上に立つものではなく、真の権威と理性とは決して対立するものではない。神の似姿としての理性は弁証論理学を使用することにより、諸権威を全体として首尾一貫して解釈することができるのである。したがって、ベレンガリウスは神学的方法の発展に重要な寄与をなしたと著者は評価する (p. 118)。当然、これはアンセルムスの場合もそうである。しかし、両者の相違は、ベレンガリウスが諸権威の解釈に終始したのに対し、アンセルムスは信仰箇条に関して理性的論証を構築しようとしたことにある。この点でアンセルムスはベレンガリウスよりも「合理主義者」であると著者は結論する (p. 132)。

以上が、著者の提示する11世紀の神学的方法の発展に関する見取り図である。次に本書において著者が独自の見解・解釈を述べている点を幾つか指摘しよう。

その第一はベトルス・ダミアニの『神の全能について』(*De divina omnipotentia*)の612A-Bに関する著者の解釈である。エンドレスはこの箇所を典拠として、ダミアニは、神に矛盾律を適用してはならず、従って全能の神には過去を変更することが可能であるとする極端な見解を持っていたと主張する。

そもそも、本書においてダミアニは神の全能に関して二つの問題を取り上げている。すなわち、「神は失われた処女性を回復することができるのか」という問題と、「神は既成の事柄をそうでなくすることができるのか」という問題である。前者については、

神が自然の法則の支配者である以上、ときに自然の法則を超えた業を行なうことも神には可能である (pp. 16-22)。後者について、著者は、608C を典拠として、ダミアニは神が過去の変更を行なわないことを主張しているとする (p. 32)。そして、上記の箇所を文脈を検討し、ダミアニが主張しているのは、神に矛盾律を適用すべきでないということではなく、過去を変更することによって処女性を回復するというような不可能性 (haec impossibilitas) を神に帰すべきではないということだと解釈する。

第二はランフランクス『主の体と血について』 (*De corpore et sanguine domini*) 417D, 418A-B における、'principales essentiae' 'secundae essentiae' の源泉に関する著者の提案である (pp. 67-76)。

サザーンはこの 'principales essentiae' 'secundae essentiae' をアリストテレスの 'prima substantia' 'secunda substantia' であるとし、ランフランクスがアリストテレス的哲学の概念、ないし『カテゴリー論』を用いて聖体変化を説明していると主張する。これに対しモンクロ (Montclos) は『ヘブル書』12:27 のランフランクスの註釈 (404A) から 'secundae essentiae' を 'extrinsecus sumptis' と等置しようとする。しかし著者はいずれも十分ではないとし、アブレイウスの『プラトンとその教説について』 (*De Platone et eius dogmate*) の次の一節を提示する。'ousias, quas essentias dicimus, duas esse ait, per quas cuncta gignantur mundusque ipse; quarum una cogitatione sola concipitur, altera sensibus subici potest...et primae quidem substantiae vel essentiae primum deum esse et mentem formasque rerum et animam; secundae substantiae omnia, quae informantur quaeque gignantur et quae ab substantiae superioris exemplo originem ducunt, quae mutari et converti possunt, labentia et ad instar fluminum profuga.' (1. 6)

もちろん、ランフランクスがアブレイウスを直接読んだという証拠はない。しかし、この指摘は重要である。さらに、著者はこの関連で、アンセルムスの『モノロギオン』 (*Monologion*) 33 章に登場する 'principalis essentia' (53. 6) にも言及している。

第三は聖体変化、すなわち 'panem et vinum per consecrationem converti in altari in verum Christi corpus et sanguinem' をベレンガリウスがどのように理解したかという点に関する解釈である (pp. 95-107)。

ベレンガリウスは『ランフランクスに答える』 (*Rescriptum contra Lanfrannum=De sacra coena*) において、パンがキリストの肉片 (portiuncula) に変化するというラ

ンフランクスの説を否定し (pp. 80-95), 聖体変化の「象徴的」理解を唱えたと考えられている (Geiselmann, Montclos, Sheedy). これに対し著者は、ベレンガリウスが聖体変化をアリストテレス的な質的变化と「比喩的な述語付けの理論」(the theory of tropical predication) に基づいて説明していると分析する。例えば、ラエリウスという人が自分の努力と研鑽によりケケロのように雄弁となった場合、「ラエリウスはケケロである」と言うことができるように、聖別されたパンは単なるパンから救いの効力をもったパンへと変えられたために「パンはキリストの体である」と言われると理解することができる。もちろん、この場合パンが「真のキリストの体」に変わったと言うことはできない。しかし、著者が強調するのは、ベレンガリウスが聖体変化の説明に弁証論理学から由来する理論を導入したことである。

第四はアンセルムスの『プロスロギオン』(*Prosligion*) の 'unum argumentum' (Prooemium 93. 2-10) の意味である (pp. 133-45)。

著者は、この 'argumentum' をポエティウスの『ケケロのトピカ註解』(*In Ciceronis Topica*) で述べられている (279. 11-33: 1050C-1051D)、三段論法における「中項」(medietas)、すなわち、両端の項が結合できるか否かを確定する項と考える。そして、「それより大いなるものは何も考えられ得ない何か」(aliquid quo nihil maius cogitari possit. c. 1. 101. 5) は、「神の名」(K. Barth), 「神の定義」(Charlesworth) ではなく、この中項であるとする。このように解釈することにより、アンセルムスは神的本質に関する伝統的なキリスト教の教義に厳密な理性的論証を導入することができたと著者は述べる。

以上、本書の概略を記したが、11世紀の知的世界、神学的方法の発展におけるランフランクスおよびベレンガリウスの位置づけ、またその聖餐論の理解については興味深い点が多々ある。この点で本書は非常に意欲的な試みと言うことができよう。

最後に本書で使用されるテキストについて述べておく。ダミアニの『神の全能について』は、カンタン (A. Cantin) による校訂版が Sources Chrétiennes 191 (1972) に収録されている。ベレンガリウスの『ランフランクスに答える』は、Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis 84 (1988) にホイヘンス (R. B. C. Huygens) による新版が写本の写真版と共に収録されている。ランフランクスについては、依然として、ミーニュ版 (P. L. 150, col. 407-442) に拠るしかないが、他の写本の異読が、J. de Montclos, *Lanfranc et Bérenger: La controverse eucharistique du XI<sup>e</sup> siècle*,

Leuven, 1971, pp. 540-545 に収録されている。

John Marenbon :

*The Philosophy of PETER ABELARD.*

Cambridge University Press, 1997, pp. xx+373.

永 嶋 哲 也

本書で主題として扱われているアベラール（ラテン名 Petrus Abaelardus; 1079-1142）は、12世紀を代表する哲学者であり、今まで彼の研究が決して疎かにされてきたわけではないはずであるが、彼の全体像、彼の哲学の全体像について何か一般に認められている共通理解があるようにはまだ思われぬ。それは、今までの諸研究が失敗に終わってきたからでは決してなく、むしろその原因は、一つにはアベラール自身がその全体像を描きあげるのに難しい複雑な人物だからであろうし、また一つには彼の生きた12世紀の西欧がまたその時代に対する幅広い知識を必要とするような複雑な時代だからであろう。しかしそういう難しい作業だといえるアベラール哲学全体の描像に関して、著者マレンボンに現在、最も相応しい研究者の一人だと言えるのではなかろうか。——著者には本書に先立って、1: *From the Circle of Alcuin to the School of Auxerre* (CUP 1981), 2: *Later Medieval Philosophy (1150-1350) An Introduction* (Routledge & Kegan Paul, 1987), 3: *Early Medieval Philosophy (480-1150) An Introduction* (Routledge 1988) などの著作があるが（なお、2と3に関しては、加藤雅人氏による邦訳、4:『後期中世の哲学』(勁草書房, 1989)と中村治氏による邦訳、5:『初期中世の哲学』(勁草書房, 1992)も出ており、また1, 3, 5は本誌において金井多津子氏により書評がなされている）、本書は、中世初期を専門とする著者が、通時的な中世哲学史の研究書をまとめた後に、中世初期の一人の巨人に取り組んだものだと言えるだろうからである。

本書は3部構成になっており、第1部で年代特定の問題や修道生活を含めて、アベラールの人生と業績について述べられ、第2部で彼の存在論、認識論、意味論という広い意味での論理的業績が論じられ、そして第3部で神学的文脈を含めた意味での倫